

サメ人間3 試読版

文:名無しの東北県人

(製本版から設定画や挿絵をカットしたサンプルになります)

ウツテンカイ

サメ人間 3

一九四九年九月六日。

「長耳を生やした鼠共よ！　そこで死ぬることを光榮に思え！」

降伏勧告の完全拒絶から約十分後——M3ハーフトラックの車上でアノニマが無線機越しに叫んだ刹那、かつてソ連の一大軍閥が事実上の第三勢力として行う傭兵派遣業の拠点としていたアイアンランドに対する総攻撃が始まった。

『戦後の午後六時に！』

瞬く間に半ば崩落した強化コンクリート防壁で四方を囲まれている東欧某所の元武装要塞国家は、意気揚々と大侵攻するも旧アイアンランドの傭兵部隊こと、現『キーボルク大隊』の反撃でその中に閉じ込められたドイツ軍の処刑場と化す。

「撃て！」
アグーイ

仰角を付けた数十門の百五十二ミリ榴弾砲が発射の反動で次々に跳ね上がり、少し離れた場所では横一列に並ぶトラックの車体からカチューシャ・ロケットが負けじと死を放つ。

「私はやれるだけのことをやったのよ」

レンズ内で車体後部ダクに傭兵デサを乗せたT・34／85中戦車やJS・2重戦車が猛進撃している双眼鏡を一旦下ろした攻勢側の指揮官は、敬愛する上官の言葉を不意に思い出した。

そこから少しだけ、どんな戦場であろうとも黒いマイクロビキニに身を包む、銀髪と薄紫の双眸の持ち主は午前六時の地獄から記憶の宮殿に足を運ぶ。

「だからもう、いいんじゃないかなって……」

ソフィア・マリューコヴァが打ちひしがれた様子でアノニマにそう言ったのは一九四九年八月十日である。

喜んでその命を捨てる味方と同じ位、心の底から死んでくれと願っている敵が米英軍・ソ連軍・ドイツ軍の全ての中に存在する状態で一秒も気を抜けぬ日々を過ごしてきた彼女の糸は、逃亡先のスペインで遂に切れてしまった。

「これがね、これが私の結果なのよ……！」

当時ソフィアはフランコ総統注1から与えられた邸宅に到着してからというものが、ほとんど一日中自室の机に視線を落とし続けるだけの日々を送っていた。

「優しい言葉を掛けてもらえるとも思いましたか？」

最初こそ大目に見ていたアノニマだったが、三日目の朝にとうとう言わないと『正気ではいられなくなり』、改造軍服から腹筋と肉感的な太腿を露出させている紅瞳の持ち主にそう告げたことをはつきりと覚えている。

「貴方は越えてはならぬ一線の向こう側にいる。自分自身の歪んだ目的のために何百万という人間を死なせた貴方は、もうただの少女には戻れない」

東部戦線のチエルカッスイ包囲戦やユーゴスラビアのドルヴァルで戦ってきたスペクター^{注2}は同種に対して続けた。

「そして貴方が諦めた後、今までの人生で一度も戦ったことがない分際で貴方を笑ってきた連中は『当然の結果だ。ざまあみろ』とソフィア・マリユーコヴァの墓標に糞を塗りたくるでしょう」

アノニマがそこまで言い終えた時には、ソフィアは早くも握り締めた両の拳を激しく震わせ、右口端から鮮血を一筋滴らせるようになっていた。

「ふふっ」

現実世界に帰還したアノニマは、コルダイト火薬の臭気で鼻腔を突かれながら口元を緩める。

結局アイアンランドの元首長が諦めなかったのは、現在こうして東欧の片隅で恐るべき死と破壊が勢い良く弾け飛んでいることで証明されている。
アノニマは、それが嬉しくてたまらなかった。

注1 フランシスコ・フランコ。スペインの最高指導者。

注2 ナチスとの戦いが激化する中、世界各地で現れたドイツ軍に抗う少女達。



「報告致します。先程アイアンランドのドイツ軍部隊に対し、キーボルク大隊の総攻撃が開始されました。ブダペスト筋の信頼できる情報です」

たった今朝食を済ませたばかりのJDは秘書からの報告を受けて、中立国たるスイスの某所に建つ屋敷内の一室で嬉しそうに微笑んだ。

「多くの罪を重ね、全てを否定されてもお生きしようとする」

ジョン・ドウ名無しに因んだ偽名を好き好んで用いるこの資産家は、ファッションにもボルシェヴィズムにも一切興味を示さない。

「やはり彼女は最高のアーティストだ」

いつものように手元で葉を弄る彼が感心を抱くのは『人が必死で運命に抗って生きようとする姿』のみであり、それに強い美意識を感じているからこそ悪夢のスターリンググランド攻防戦で大勢の仲間を死なせて僻地に追放されたソフィアに手を差し伸べ、彼女に復讐を誓った者達にも支援を行ってきた。

「ボヘミアの伍長も少しは見習うべきだ」

呆れ混じるJDの発言は、一九四六年終盤から始まったアドルフ・ヒトラーとナチスドイツによる世界支配が結局のところ、到底三年目を無事終えられそうにないことに起因している。

今年初頭に戦力再建に成功した連合軍が西海岸・カナダ・メキシコ方面からの攻撃で北米大陸を即時奪還したかと思えば、間髪入れず六月にはウラル地方から突如出現した新興勢力『神聖ロシア帝国』によってユーラシア大陸のドイツ軍は北のソスノヴィ・ボールから南のオデッサに至る線まで押し戻されていた。

この状況下でソフィアと彼女が率いる軍閥は根拠地としていたピッツバーグを放棄した上で北米から脱出、中立的立場を取るスペイン経由でアイアンランドに出戻るが、ロシア側への再合流を危惧したヒトラーは同地への侵攻を指示した。

東部戦線で四百キロも突出したドイツ中央軍集団の正面には、首都ベルリンを最終目標する大軍が控えているにも関わらず……。

「今度こそあの女狐も終わりだろう」

とはいえアイアンランド時代からソフィアを忌み嫌う者達は世界各地で密かに溜飲を下げていた。何せ正規軍と消耗し切った武装集団の戦いなのである。

こうして一九四二年のドン川周辺が雪なき季節に再現されることとなった。

ソフィアの『キーボルク大隊』はドイツ軍をアイアンランド内部に引き込んで凄惨極まる市街戦を展開、その後無数の航空機や戦車及び火砲を持つ予備兵力を投入して包囲してしまった。

そして今日、大隊の名を持ったまま巨大化した軍集団は降伏勧告を無視したケッセル孤立地帯に容赦ない総攻撃を仕掛けたのである。

「世界は団結して彼女を阻止した。これ以上の厄災を起さぬように」

今もソフィアから支援金の返済を受け続けているパトロンは秘書が机に置いたカップを手にとると、いつも通り落ち着いた様子で中の紅茶を一啜りした。

「だが世界は何も理解していない。ソフィアは厄災を引き起こすのではないよ。」

彼女自身が大いなる厄災なのだ」

そして小音を立ててカップをソーサーに戻し、机上のアイアンランドの地図を食い入るようにつめた。

きつと現地は今頃、魔女の大釜と化しているであろう！



一九四九年九月一日。

「おかえりなさい」

胴体の赤と黄色の帯上にロシア語で『スターリンググラードからベルリンへ』と書かれている機体から上官が現れると、彼女の到着を今か今かと待ち兼ねていたアノニマは早足でヘリに近付いた。

「ただいま」

アイアンランドから西方に八十キロの地点にあるキーボルク大隊注1の前線基地に降り立ったソフィアは、公私共に深い関係にある、匿名の女性形を名に持つ者と握手を交わす。

F a 2 2 3 ドラツへのドア前に伸びる赤絨毯の左右に並ぶ傭兵達はそれを見て、バラクラバから覗く目元を思わず緩めずにはいられなかった。

「状況は？」

手が離れるなりレッドカーペットの上を歩き始めたソフィアが問うと、

「この地区のドイツ軍は全て孤立地帯内に閉じ込めました。解囲を図った部隊も全て撃退してあります」

彼女に倣い踏み出したアノニマは「私も五回拳銃の弾倉を交換しましたが」と前置きした上で即答した。

「無理させちゃってごめんね」

「とんでもない。貴方がしてきた無理に比べれば楽なものです」

そして早足でソフィアの前に出た銀髪鬼は待機していた軍用車のドアを開けて彼女を後席に座らせてから、自らもその左隣に腰を沈めた。

「しかしこの『パブリト』という輩、本当に信用しても宜しいのでしょうか？」

閉音と共にフィンランド人運転手がアクセルを踏み込むなり、頭に猫耳めいた飾りを付けているアノニマは胸中の懸念を口にする。

本来ならアノニマに諸々を一任する筈だったソフィアが今こうして東欧某所に

舞い戻った理由は二つ。

一つはアイアンランドの司令部に身を置いているドイツ軍将校が、パブリトの偽名で「貴方の配下に加わりたい」と直談判を申し入れてきたためだ。

「この状況で営業を掛けてくるんだから余程の有能か、それとも救いようのない大馬鹿のどっちかでしょう。少なくとも会ってみる価値はあるわ」

やがて二人を乗せた軍用車は基地内の臨時修理工場前で停車する。

「わお」

アノニマから戦車の砲塔がクレーンで吊り上げられ、あちこちで溶接の火花も散っている場所の最奥に案内されたソフィアは依頼物を見た。

「イルザが調整を施しました。適合なしでエネルギー・コアの能力を使用可能、光学迷彩とアクティブ防護システムも追加してあります」

「パーフェクトね。素晴らしいわ」

油臭い空間で嬉しそうに依頼物を見上げるソフィアに対し、表情を険しくしたアノニマは「ですが」と告げる。

「孤立地帯に直接出向かれるのはやはり危険過ぎます」

「私を信じてくれた人達はあるの中で戦っているわ」

しかしソフィアは自分用の重武装強化外骨格から一切視線を離さない。「今回の出撃は、みんなに対する私なりの礼儀と解釈してもらえると嬉しい……」ただ、そう返すだけだった。

注1 ソフィア個人に忠誠を誓う私兵部隊。ロシア語で『サイボーグ』を指す。



アイアンランド唯一の飛行場は砲撃により破壊された各種航空機で『遠くまで散らばる機械の墓場』と化してはいたが、まだ辛うじて機能していた。

「アドラー2・1より管制塔へ、着陸させてもらうぞ」

そんな場所に、焦げ臭い大穴を縫うようにしてドイツ空軍のJu52輸送機が降り立つ。

「空気でソフィア臭くなってやがる」

レベッカ・ストロングホールドが地獄で最初に見たのは、纏めて滑走路の脇に押しやられたルフトバッフェの無残極まる骸だった。

「お待ちしております」

空の橋として孤立地帯内に物資を送り込めるが故、一時期最優先目標となった場所には使用可能なHs 129襲撃機もAr 234偵察機も既に存在していない代わりに、出迎えのエルフ達が右手を高く上げて敬礼する姿があった。

「他の……人達は……？」

後ろの部下数名同様にドイツ軍の軍服を着たカール・ミュラーなる長耳種の少尉は、古めかしい三発型輸送機がレベツカを降ろすなりそそくさと離陸準備を始めたのを見て困惑する。

「第二十二カン^戦ブルツペ^闘をお迎えするようにと言われて来たのですが……」

「ああ、俺だよ。俺がカンブルツペ。たった一人の戦闘^団」

短い黒髪と青の瞳を持つ、イギリス自由軍団^{注1}の改造制服に身を包む女性将校はさも当然のように答える。

「ソフィアをぶつ殺しに来た」

フォルクスドイッチェ

続いて民族ドイツ人にやってきた理由を教えたレベツカは一九四五年十二月のアイアンランド襲撃作戦で唯一生き残り、その後食うために協力したナチスから

見返りとして行方不明者の軍籍を与えられたミュータントである。

「出迎えご苦労さん。これでお前らの任務を解除する」

火傷痕で潰れている左目を眼帯で覆った『大砲に食われる運命の新鮮な肉』は次に、この戦争は人間達が始めたものなのだからそれ以外が死ぬ必要はない旨をミューラーに話す。

逃げる、と。

眼前の長耳野郎共がどこから来たのか見当もつかないし知るつもりもないが、レベッカは会って数秒で彼らが弾薬箱を持ち上げることもできぬ、単に自負心が強いだけの役立たずであることを見抜いたからだ。

要するに一緒にいられても迷惑なのである。

「お断りします。総統のために戦って死ぬと誓いました」

しかし隊長格の少尉は薄汚いヘルメットの下で顔を強張らせた。

「年は幾つだ？」

「十六歳。この中では最年長です」

「そうか」

短いやり取りの直後、ミューラーの額はレベッカがホルスターから引き抜いた

ルガーP08拳銃で撃ち抜かれた。

「銃と軍服をどっかに隠して、さっさとここから脱出しちまえ！」

そしてレベツカは血まみれの眼鏡が転がるのに続いて崩れ落ちたリーダーと、九ミリパラペラム弾によって後頭部に開いた火口の如き穴、大きく開いた両目と半開きの口に思わず言葉を失ってしまったエルフ達を大声で怒鳴り付ける。

「ソフィア・マリユーコヴァは俺程優しくもなければ甘くもねえぞ！」

全ての視線を自分に向けてきたエルフに送った彼女の言葉は、自らの実体験に基づく心からの警告だった。

注1 武装親衛隊のイギリス人部隊。



「ヒトラーの大馬鹿野郎！」

ソフィア来訪で活気づくキーボルク大隊の前線基地——その一角にある建物に監禁されている神聖ロシア帝国軍の兵士、ヨシミーキンは壊滅的発音の母国語と

共に汚水を浴びせられた。

ヴァイナール・カフート

「戦争は終わり！」

針金で手足を椅子に縛り付けられた男性が激しく咳き込みつつ顔を上げると、そこには星条旗柄のビキニを纏うイルザ・ヴァレンシュタインがしゃがみ込んで両足を大きく広げている地獄絵図が広がっていた。

「腐った……ッ！」

数日前に特使を名乗ってソフィアの暗殺を単身謀るも失敗したヨシミーキンは、拘束後に受けた激しい暴行で痣だらけになっている顔を上げる。

「ナチ野郎が……ッ！」

そして、背後にバケツを持ったフランス人傭兵を居心地悪そうに立たせている褐色肌の女性将校を睨み付けた。

「のんのん！」

金色の瞳と茶色のポニーテールを持つイルザは、今度はドイツ語で否定する。

「今は『元ナチ野郎』ですん！」

彼女はナチスの先端技術部隊を率いる身でありながらソフィアとの蜜月を育み、アイアンランドが第三帝国に寝返る際にはそのパイプ役を務め、ヒトラーと袂を

分かった今もキーボルク大隊と行動を共にしているマッドサイエンティストだ。

「コアントローですん？」

解けたビキニの紐を締め直して立ち上がったイルザは被拷問者の右前方にある机に向かうとその上の諸々に手を伸ばし、木箱やペンチで捻じ曲げられた信管を取って見た。

神聖ロシア帝国からの贈り物と称してヨシミーキンからソフィアに手渡された時限爆弾の関連物である。

「あの方はどれだけ喉が渴いてもお酒は飲まないですん」

信管を薄汚い机上に戻したイルザは屈辱に打ち震えるヨシミーキンに近付き、思い切り「リサーチ不足ん！」と足を踏み付けた。

「——ッ」

苦悶の吐息と共にその頭が揺れ、切り落とされた右耳の膿んだ断面から蛆虫が零れ落ちる。

「お前らのボスはヒトラーに味方して何百万人と殺したんだぞ！ 本当に一体、どの面下げて生きているんだ……！」

ソ連が完全崩壊して神聖ロシア帝国が誕生する要因を作ったのは、ある意味で

新世代の特権階級とも言えるソフィアだった。

連合国の一員として戦いつつも西側のスペクター達に憎悪を抱いていた彼女は、歪んだ復讐劇を完遂させるため第三帝国の天才科学者であるイルザを囲い込み、傭兵派遣業のギャランティとして得た金を湯水の如く注ぎ込んで『あるもの』を開発させた。

「人殺し共が……人殺し共……！」

V2ロケット内に格納した『あるもの』を米本土と英本土の合計五十六箇所に撃ち込むソフィアの初期プランはアイアランド全軍のドイツ側への寝返り後、より大規模なものに——モスクワやレニングラードを追加——修正・実行されて大戦終結に決定的な役割を果たした。

ヒトラーが奇跡ヴンダーの超兵器の開発に劣等人種たるロシア人が関わっていることを看過できなかつた故に『あるもの』はドイツ製という形に偽装されているもの、真実が何であるかは誰にとっても公然の秘密となっている。

だから神聖ロシア帝国にもソフィアを憎悪する者は少なからず存在しているし、現にヨシミーキンは行動を起こした。

「未練がましくそんなもの付けやがって……！」

針金と皮膚の接触部から鮮血を滴らせているロシア人は、イルザの喉元にある鉄十字やビキニに配置されている武装親衛隊の紋章を睨み付ける。

どちらもナチスと絶縁した今では文字通り、飾り以外の意味を持たぬ二物。「これん？」

冷たい視線に気付いたイルザはヨシミーキンの顔をとりあえず一殴りしてから、豊かな左右の豊満を揺らしつつ彼の前で身を屈めた。

「ナチズムは私にとってファッションに過ぎないので、セーフですん！」



粉塵の帳に包まれたアイアンランドでは、長期かつ凄惨なる包囲戦でとうとう未開人のような姿——伸び放題の髭と隅々まで汚れ切ったドイツ軍の軍服——に変わり果てたエルフ達が、自ら破壊した都市に潜んでの抵抗を続けている。

突如聞こえてくる負傷者の叫びなど気にも留めなくなった彼らは地下壕の奥で残り少ない馬肉を貪り、時に撃ち殺した東方労働者のウクライナ人を食糧として

オストアルバイター

『分配』した。

「死によって全てが終わる」

ケッセル 孤立地帯に閉じ込められて以降、全ての面で優勢な敵に絶えず圧迫され続けたエルフ達は自分達の敗北を内心で認めていた。

「それ以外の帰結はあり得ない」

しかし彼らは同時に、最後の瞬間まで戦うこともまた誓っていた。

敵の軍門に下ろうとした戦車部隊はI L・2シュトルモビク攻撃機の恐るべき攻撃に曝されて原形留めぬ肉の塊に変えられ、全ての装備を失った高射砲部隊もまた千切れた手足となって電線に引っ掛かるか、T・34／85中戦車によって機械油で覆われた道に無理矢理プレス加工されたからだ。

「共に勝つか！ 共に死ぬか！」

今年四十八歳になるオスカール・ヴァイディングー中佐は、そんな長耳種達の

ミッターベルケ

指揮中枢である地下司令部こと『中央工場』の廊下に座り込んで酒を飲んだり、うろうろしながら「自殺には拳銃と青酸のどちらがいいか？」を議論する者達を怒鳴り付けながら歩を進めていた。

「ナチ党員にこれ以外の道は有り得ない！」

人間に率いられたエルフの軍勢が包囲後も辛うじて現状を維持できているのは、逃亡者を容赦なく木に吊るし、その死体に『私は義務を果たしませんでした』と書かれた木札を掛けるという彼の手法に因る部分が非常に大きい。

ヴァイディングガーはアイアンランドに総進撃したドイツ軍が鼠達ラッテン・クリークの戦争を経て一大殺戮場となったその内部で皮肉にもソフィア・マリューコヴァの豪邸地下に司令部施設等に移し、彼女が行った粘着質なまでの焦土作戦によって地上からはコンクリートの入口に間に合わせの鉤十字の旗が掲げられているに過ぎぬ状態に追い込まれてもなお、ヒトラーに対する強烈な忠誠心と勝利への飽くなき執念をまだ失っていないように見えた。

「国家社会主義は党の綱領ではなく、ドイツ人の神髄である」

常日頃からそう公言している男は司令室のドアを開けると、中の上官に対してナチ式敬礼を行う。

「報告致します！」

だが天井や壁に巨大な亀裂が幾つも走っている空間にいる将官はうたた寝から目を覚まさない。

「閣下！」

死人宜しく俯いて眠っていた五十三歳は、ヴァイディングーから一喝を受けて弾かれたように飛び起きた。

「ああ……すまない……」

眼鏡を外して何度も両目を擦りながら謝罪するフォン・シュネーマン将軍は、アイアンランドにおけるドイツ軍の最高司令官であった。

参謀畑の出身で精神的に強靱ではないタイプの彼は戦況悪化による自信喪失、逃げ場なき『無蓋の要塞』に追い込まれてからの馬鹿げた死守命令と撤退の禁止、エルフの健康問題、更に捕虜となった後に敵から受けるであろう飢えや悲惨への恐怖で心身を酷く擦り減らし、右顔面の痙攣や下痢に常時苦しめられている。

その辺りの事情もあって、東欧に孤立するドイツ軍を事実上指揮しているのはシュネーマンではなく副官のヴァイディングーだった。

「我が軍はエネルギーに反撃しています」

執務机に近付いたヴァイディングーは口端の涎を拭き、裾を直した将軍の前でその上の地図をなぞる。

「市街西部では敵軍の攻勢を見事に撃退致しました。あの胡散臭い小娘の血圧は

いつも以上に上がっていることでしょう」

ロシアの女性兵士に対する侮蔑的思考から逸脱できていない男は司令部という牢獄に囚われ、副官なる看守に常時監視されているシュネーマンに対して続ける。

「更に南部では二キロ前進することに成功したとのことです」

「敵は我々が反撃したことに気付いてくれただろうか……」

「何を弱気な！」

老将軍が大きくため息を吐く一方、ヴァイディングガーは身を前に乗り出す。

「地上の如何なる力も、我々をこの場所から追うことはできぬ！」
アイアンランド

「頼むから大声を出さないでくれ……頼むから……」

大観衆を前にして、とても使用できぬカスターネットでベーターベンのソナタを弾くことを要求されたギタリストは懇願の声を漏らす。

「スターリンググラードと同じだ。出よう」

そして、シュネーマンはもう何度目になるかわからない弱音を口にした。

「アイアンランドを放棄すれば大量の物資を失うことにはなる。しかしエルフト装備の大部分を救い、それを将来の作戦に使うことが可能だ」

シュネーマンのこの発言は、一九四二年十二月後半に辛くも包囲殲滅を免れた

スターリンググラードの第六軍の生還に起因していた。あの時は『我が軍は同地のソ連軍需産業を完全に破壊し、敵兵力を粉碎してヴォルガから撤退した』という形で全てが丸く収まった。

「それに空軍の支援も期待できない……」

これもまた、人間の悲惨・傲慢・愚がこれでもかと詰まったヴォルガ川西岸の巨大工業都市の場合と同じだった。

ドイツ空軍は輸送機だけでなく爆撃機まで使い孤立地帯に空輸を行っているが最低必要量の三分の一以下しか運べておらず、薄汚い瓦礫の中で戦うエルフ達は今この瞬間も油膜さえ浮かぬスープで飢えを凌いでいる。

要するにルフトバッフエにはジェット戦闘機と高性能レーダーを組み合わせた防空システムをドイツ本土に構築する能力はあっても、包囲された軍勢を空から養えるだけの余裕はないのだ。

「敵は慈悲など持つまいが、このまま戦闘を続ければ全滅は必至であるのに対し、投降すれば少なくとも人命の大半は助かる見込みがある……」

やがてシュネーマンは弱々しく降伏の選択肢を口にし始めたが、それに対して副官は何も答えず、ただうわ言のように言葉を並べる将軍のペンを奪って自分の

書類に走らせただけだった。

ヴァイディングガーの中にある上官への敬意は、明日見えぬ過酷な包囲戦の中で
とうの昔に消え去っていた。

残されているのは、ただ――。



アイアンランドの市街西部に浅く掘られた塹壕から身を乗り出して煙草を吸う
レベツカの瞳には、地面に何十も開いた摺り鉢状の砲弾穴や車体が大きく裂けて
真っ黒に焦げたJ S - 2重戦車の残骸群が映し出されている。

「狼の世だ。羊の皮を被った、狼達の世」

レベツカは更にその向こうにある壁だけが焼け落ち、シユールレアリズム的な
墓場のように列を作った煙突や外郭から塹壕内に視線を移す。

そこには、彼女が指揮することになった長耳種達の姿がある。

汚染された水を飲んでしまったために腹痛に苦しむエルフAは、まだ生暖かい
糞を外に投げ捨てている。勿論、その姿は周囲の全員に目撃されていた。

ほとんどが灰緑の顔色にも関わず、一人だけ薄く赤み帯びた顔のエルフBは誰とも目を合わせない。彼は空腹に耐えられなくなって人肉を——薄切りにして茹でた死体の尻肉を『これはラクダの肉だ』と自分に言い聞かせて——食べた。

エルフCと同Dは情報収集用の捕虜を捕まえにくる挺身斥候班に怯えながら、つい最近死んだばかりの軍馬が鼠や野犬に荒らされるよりも早くそれらの腹肉を抉り出そうと試みている。

狼の世。まさに羊の皮を被った、狼達の世である！

「君達は敗戦した。ヒトラーは我々を騙したのだ」

レベッカがサーディン缶をポケットから取り出した時、塹壕前面に立ち込めるミルクのように濃い霧の向こうから、投降を呼び掛けるキーボルク大隊の放送が聞こえ始めた。

「私もドイツ兵として勇敢に戦ったが、その果てに上層部の大嘘と自らの誤りに気付いた。ソフィア・マリユーコヴァは我々にも手を差し伸べてくれる。彼女は狂人ではない。温かな食事を提供し、故郷に帰してくれる」

食べ終えたレベッカが残る油を指で拭って口に入れてから缶を投げ捨てた時、視界端に放送を真に受けたエルフが塹壕から飛び出していく姿が見えた。

「オカッチやめろ！」

「戻れ！ あんなの大嘘だぞ！」

仲間達は口々に制止の叫びを上げるが、馬肉を数切れ浮かべただけのスープを三日に一度だけ食らい、両目を血走らせて昆虫や猫を探していることさえあった彼は姿が見えなくなるまで振り返りもしなかった。

「ん？」

塹壕の中に腰を下ろして体力を温存していたレベッカがディーゼルエンジンの轟音と履帯の軋音で鼓膜を叩かれたのは、それからちようど七分後である。

「敵だ！」

大きく右目を見開いて立ち上がるのに前後して濃霧が晴れ、

「助けて！ 助け……」

慌ただしく火器類の安全装置を外す彼女達の前に、全力疾走で走り戻ってくるオカッチと戦車の横隊が現れる。

勿論味方ではなくキーボルク大隊の戦車が！

製本版に続く